
魔不良冒険奇行 ~電撃! 学園都市編~

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔不良冒険奇行 ～電撃！ 学園都市編～

【コード】

N5088Y

【作者名】

ヒロ

【あらすじ】

天然種超能力不良少年・伊吹圭介がありったけのネタをかき集め目的のブツを探しに行く話です。

舞台は学園都市。テーマは「とある魔術の禁書目録」「とある科学の超電磁砲」になります。今回は1日目の話です。
今回の闇のご依頼は「最終兵器」って、なんだ？

これを夢旅人さんに捧げます。

最初の日・朝 「10:00」

400ccの4サイクルエンジンが腹の底で小刻みに鼓動を繰り返し、右の靴底の向こうでは断続的に温室効果ガスを垂れ流す。環境にも財布にも悪い、まことに前時代的な中型バイクを伊吹圭介は非常に気に入っていた。

17歳の彼がこのバイクに乗り出してから日は浅い。またこのバイクは突然しゃべりだしたりも空を飛んだりもしない。陸上を走る当たり前の二輪駆動だ。なにげなく手を置いたボディには赤い手製のペイントのムラがやや目立っている。それでもわざわざ煩わしい検査を受けてまで、こうして“こんなところ”まで乗り込んできたのだ。愛着の強さの証左と言えるだろう。

エンジンを切り、かぶったフルフェイスのバイザーをあげる。赤いレザージャケットの内ポケットから、やや煤けた紙を取り出した。目的地までの略図のはず。だが、インクが乾く前にたたんでしまったせい、まるでなにも読み取れない。せいぜい、これから歩む未来の暗喩でないことを祈るだけだ。

「……どー、すつかよお」

ヘルメットを脱いで薄く汗ばんだ黒髪をかきあげ、やれやれと肩を落とした。

これは圭介が学園都市でついた悪態の、はじめの一回になる。

最初の日・昼 「13:00」

学園都市。そこは人の英知を司る場所だと聞いていた。20年先の技術を持つだとか量子演算のスーパーコンピューターがどうだとか能力開発がなんとかかんとか。

しかし伊吹圭介という一個人にしてみれば、まことにどうでもいい話だった。むしろ嫌悪すら感じていた。

学園都市。学園。学校の街。勉強ですべてが埋め尽くされているイメージだ。勉強嫌いで中卒のフリーターにしてみれば死にたくなるような地獄の光景がありありと想像できない。いつそのこと現場から数本抜いてきて発破、汚い花火に変えてやりたいという衝動は弱くない。そうして物理的に支配構造を打ち砕き若い力をスパークさせてやるのは決して間違いではないはずだ。そうだそうに違いない。などとテロリストじみた思考を悶々と重ねていた圭介だったが、実際中に入ってみれば、なかなかどうして、直接伝わる街の雰囲気は悪くない。でかい扇風機が何本も並んでいる様はまさに奇天烈だが（風力発電機なるものを圭介は知らない。せいぜいドン・キホーテが突っ込んでいく風車程度である）、空を飛ぶ飛行船にはロマンが溢れているし、うねうねとゴミ箱が動いて街に学生然としたガキ共が多いことを抜かせば普通の街といって差し支えない。路地裏には圭介と同じにおいをつけてそうな少年少女すら見て取れる。勉強の街にも裏表はあるようだ。そういう部分には共感すらもてそうだ。

さて。それはそうとして、だ。

地図がない。もらった地図らしい紙に描かれているのはただの地獄絵図である。行くべき場所がどこにあるかわからない。こんなことなら施設の名前くらい聞いておけば。いや、どうせ覚えられないから意味がない。

聞き込みでもするしかないだろう。断片的な情報は手元にある

のだ。だがしかし。無学な圭介には果たしてそれが“ある”ものなのか、甚だ疑問であった。聞いたことはある。しかしアニメマンガの中、空想世界の話である。ここがいかに20年先を行っていようが、圭介の常識は聞いた覚えのあるバイクメーカーが二足歩行ロボットを作って稼働時間十数分でのろのろ歩く程度の技術だ。圭介にしてみれば既に理解不能な技術レベルだが、見ていてバイクほどにボルテージも上がらない。あれが20年でどう進化するかは想像もできないが、それは圭介が必死に覚え込まされた都市伝説のような与太話に匹敵する気がまったくしない。聞いて笑われてせいぜいだろう。

「なんて、言ってもらんねーか」

肩をすくめ、圭介はもう一度ぐるりと周囲を見渡した。適当に話ができそうな人間に当たりをつけなくてはいけない。情報収集のために話しかけるのだ。根暗と馬鹿は駄目だ。ある程度真面目にこちらの話を聞いてもらわなければならない。焦っている人間や早足に急いでいる人間も駄目だ。それでいて ああ、もう。わけわからん 圭介が舌打ちする。途端に周囲の学生がビクツと身を震わせた。

馬鹿筆頭の自分が利口に振る舞おうとするのがそもそも間違いなのだ。唯一無二の直感を信じるべきだ。目を凝らし、周囲の人間にざっと注目して 決めた。

「おいそのガール。お前だお前。奇抜なお前だ」

無遠慮に人差し指を伸ばしてひとりの女の子を指差した。圭介をして奇抜と揶揄された彼女は、確かに人混みの中でよく目についた。決して涼しくない気候の中で丈の長い服装、それも修道服である。圭介の声が届かなかったのか、修道女は止まらない。しかしあれだけ浮いた見た目ならどんな馬鹿でもまず見失わない。

あの身なりなら確実に何かしらを知っているに決まってる。そうした根拠のない自信に溢れた憚然とした態度で、圭介は修道女に「さあ、さあ」と近づいていく。道行く学生は揃って後ずさって圭介を避

け、修道女までの道が自然と出来上がる。周辺の人間の雰囲気とは明らかに異なる圭介が寄つてきてか、はたまたざわつく周囲を怪訝に思つてか、修道女はぴたりと足を止めて圭介に顔を向けた。

「いきなりで悪い。あんたと話がしたい」

「す」

据わつた目で修道女がくちびるを弱く動かした。長い銀色の髪が揺れて頬を叩く。それで緑色の目の前がいくらか遮られていても構わない。ゆらりゆらりと体を揺らすその異様さは、数々の修羅場をくぐり抜けてきた圭介をして身構えさせるほどの迫力を帯びていた。生唾を飲み込み思わず拳を握り締めた圭介に向け、修道女はもう一度、口を開く。

「おなかすいた」

瞬間、圭介は脱力した。

* * *

「もう大変だつたんだよ。冷蔵庫になにも入ってなくて、飢えて死んじゃうかもつて」

手近のファストフード店の安くて質素なハンバーガーの封を破り、幼い修道女はそれにかぶりつく。あわや自分の手まで食いちぎりかねないその勢いに、圭介はただ言葉を失つた。腹が減ることの重要性 それは世界的な飢餓や歴史的な革命を引き合いにしたものではなく、ここではただ単純に彼の実体験によるものである

は彼も知るところである。しかし、知らない野郎にホイホイ付いて来るのは問題ではあるまいか。

「この間は学校から早く帰ってきてくれたからいいけれど、とうまったらお昼を過ぎてもぜんぜん来ないからまたこうやってとうまの学校めさしてたんだよ」

また“とうま”か。

店に入ってからの一時間、繰り返し繰り返し繰り返しハンバ

「ガーの間から出てきている言葉だ。どうやら名前のようで、一緒に住んでいるらしい。語感から彼か彼女かはわからないが学生らしいそのヴィジュアルを圭介は特徴のない二頭身でイメージした。いかつい髭面は、間違いなく縁日で売られるダルマの体裁を取っていた。

「うん。ごちそうさまでした。ありがとう。インデックスさんのお腹はいっぱいかも」

「あー、んじゃあインデックスさん？ 俺聞きたいことあんだよ」「なに？ 幸せ気分な今の私は、懺悔を快く受け付けちゃうよ」「……………」

ざんげってなんだ、という疑問文を無理矢理飲み込む。難しい話を聞いて頭が痛くなるのはゴメンだ。

「ロボット見たことないか？」

「ろぼ……つと？」

「えーと、ドリルとか出る。たぶん。二足歩行。たぶん。変形合体する。たぶん。ビーム出る。たぶん。あと10万馬力。たぶん」

「おおー。なんかすごそうだね」

圭介の曖昧な説明に、インデックスは抑揚なく感想を述べた。首を傾げつつ、なんだかテレビで見たことあるかも、と一言付け加える。

「テレビ？ どんなんだ？」

「カナミンの番組。おつきいけどこの間壊れちゃったんだよ」

「壊れたのか。なら違う。俺以外には壊せないらしいぜ」

「けいすけは強いのか？」

「これでもタイマン無敵だぜ。半端な奴には負けねー」

「ふーん」

見得を切つてまで言ってみせた無敵宣言を軽くないなされ、圭介はどつと肩を落とした。ストローに口を付けてコーラの味で気分を切り替える。単純思考の特権のようなもの。さっさと話の切り口を変えることにした。

「腹も膨れて、どうするんだ？　これから」

「んー、とうまをこのまま迎えに行くのもやぶさかじゃないかも」

「よっしゃ、なら行こうぜ」

「もちろん。でも学校の場所がいまいち……えっ？　いつしよに来るの？」

「おう。そいつにも聞いてみようと思つてさ」

「でもどっちに行けば学校なのかよくわからないだよ」

「ばっちこい。そういうときはこの秘密道具があるぜ」

そう言つて赤いレザージャケットのポケットをまさぐつて、圭介はまた見得を切つた。

「てれれれーん。由緒正しい六角エンピツうー。こうして先が鋭い方を下にして会いたい人を思い浮かべて手を離す。するとエンピツの指す方向に　」

「ちよつと魔術を馬鹿にしすぎなんじゃないかな！」

いやでも凄いだぜこいつ現役時代の選択問題は負け知らずで
そうした経験を交えた反論を展開しかけたが、インデックスの
極めて真面目かつ鬼気迫る表情を前にして、圭介は大人しく閉口し
た。

最初の日・夕方 「16:00」

結局、勘に頼ることにした。自信の理由はまた噛みつかれないように押し黙っておく。

道中、何度も幾度も“魔術とはなんたるか”を力説され、圭介の使う百戦錬磨の“熱血必中！バスターエンピツ（正式名称）”は徹底的に蔑まれた。やや気落ちした圭介だったが、特に異も唱えずに黙々と重いバイクを引いていく。ここで彼女に口答えすれば、間違いなく拳に訴えかけることになるだろう。確かに彼女はどのようなもなほど凶々しく遠慮のないクソガキであるが、まだ圭介の思う“一線”は越えていない。尤も、この調子なら時間の問題だろうが。

一通り言い終えたようで、インデックスは胸元に保管していたらしい猫を抱きかかえて戯れている。気疲れした圭介はぐったりと肩を落として逃げ場所をすぎるようにして視線を泳がせた。

ふと、視界の端が青白く発光した。

思わず足を止め、顔を向ける。人気の薄い河辺の道だ。手すりの向こうで再度発光。雑踏の中で聞こえづらいが、どうやら手すりの向こう側、足元には道があるようだ。

インデックスを放って、興味本位に足を向ける。バイクを歩道に乗り上げ手すりの向こうに首を伸ばした。

「ほら、これでわかったでしょ？ さつさとどっかに消えなさい」
やたら勝ち気で高圧的な茶髪が及び腰のチャライ金髪少年と相対していた。茶髪の後ろには、似たような服装の黒髪と、両手にビニール袋を抱えた学ラン姿の少年が控えている。少年は黒いウニのようなツンツン頭である。そういえば道中、何度か見かけた髪型だ。色は金だったり青だったりしたが。ここではあんなのが流行っているのだろうか。

茶髪の周りが青白く発光した。

電流か？

「これに懲りたらさっさと帰りなさい。さもないと」

「やめるビリビリ！……もういいだろ」

「はあ？ この子が嫌がってるのに無理矢理……その、迫ってたのよ？」

「ただのナンパみたいなものだろ。そりゃあ確かにそいつはガラ悪そうだし、この子も嫌がってたさ。でも暴力に訴えてた訳でも、大勢で寄ってたかった訳でもないんだ。あんまり」

「そう。あんた、こいつの肩を持つんだ」

またビリビリの体の周りが紫電に照らされた。感情の高ぶりに呼応するように紫電はその軌跡を増やしていく。圭介は直感する。

これが噂の“能力開発”か。

肌が攻撃の意識を敏感に探り当て、様々な喧嘩で培った鼻はその狙いを嗅ぎ分けた。既にビリビリははじめのチャラ男など眼中になく、平気で背を向けてレジ袋両手の少年に攻撃する気なのだ。チャラ男はもう戦意を喪失しているようで、悪態も漏らさず走り去っていく。

一層ビリビリの攻撃の意識が高まる空気を感じ取った。ウニ頭が身じろいだ。その隣の黒髪少女は動けていない。ビリビリの威圧に足がすくんだようだ。

圭介の直感がささやく。まずい。このままだと。ビリビリがなにをしようとしているのかはわからないが、強い攻撃が出る。拳よりも遠い場所になにかが撃ち出される。そのままやれば、ウニ頭も黒髪少女もまずい！

「おいお前」圭介は注意をそらそうと鋭く言葉を発し「あーっ！　とうま見つけたんだよ！」

急に脇から聞こえた声に、圭介は思わず視線を走らせた。インデックス。放っておいたのだが、律儀に付いていたようだ。

「インデックス！？　どうしてこんなところに？」

「とうまが悪いんだよ！　ごはんがなくて飢えて死にそうだったかも！」

「……」と、ごめんなさい」

ビニール袋を抱えたまま、とうまはがつくりとうなだれた。とうまに釣られるようにビリビリの意識もインデックスの方に散ったようで、攻撃の意識が弱まっていく。これ幸いと黒髪少女は軽く会釈を入れて、やはり走り去っていくのを圭介は見逃さなかった。

「インデックスさん。あのウニがとうまなのか？」

「そうだけど……とうまは食べられないからウニって言うのは語弊があるかも」

普段噛みついてる私が言うんだから間違いないんだよ、とインデックスが胸を張った。その様を軽く無視し、圭介は手すりから軽く身を乗り出した。

「あんたがとうまか。思いのほかすつきりした顔してんのな」

「えっ……と、ありがとうございます……？」

「とうまはロボット知らないかー？」

「はあ？ ロボット……そこらの清掃ロボットとは違うんで？」

「……えっ、あれもロボットなの」

驚く圭介にまたとうまは驚いて、本当に現代人なのか、と呆れ顔で呟いた。

「まったく、あなたは本当に……！」

攻撃の意図が強まり、ビリビリの体の紫電が膨れ上がる。来る。圭介は反射的に身を乗り出した。

「どこまで人を馬鹿にしてるのかしらっ！」

ビリビリの伸ばした指先に従い、青白い光の束　電撃が空気を切り裂いてとうまに襲いかかった。とうまは反射的に顔を守るように腕を上げる　そのとうまの“反射”と圭介の次の“反射”は、ほぼ同時だった。

背中に電撃の光量と熱量を感じつつ、圭介は降り立ったアスファルトを躊躇わず蹴り飛ばして疾走し、半ばタックルのようにしてとうまを抱きかかえて後退させた。ビリビリを振り返ると、今までとうまが立っていた場所は焦げて黒く変色していた。

本気か？

こんな“能力”を人に向けた？　こんな簡単に？

許容できない“一線”が越えられたことを感じ取り、圭介は拳を握り締め。

「卵おおおおおおお！！」

耳元でとうまが叫び、圭介は直感で視線を上げた。レジ袋が宙を舞う。はだけた中身に卵パツクらしいものが認められる。

また直感が圭介を突き動かした。

とうまを放り出して地面を蹴り上げ、レジ袋に手を伸ばす。

目一杯広げた指が　捉えた。レジ袋の端を引っかける。手探り

にそのまま引き寄せ、両手に抱きかかえ。

圭介は見事、川に落ちた。

* * *

「本っ、当にありがとございました！」

「お、おう」

見ていて気の毒に思えてくるほど頭を下げ続ける当麻に対して、圭介は反応に困りつつ、とりあえずは濡れたシャツなぞ絞って水気を抜いてみせる。

9月頭のこの時期は残暑というのも苦しい過ぎやすい日和で、水浴びの旬はとうに越している。確かに気を病むかもしれないが、圭介は生まれてこの方、風邪を一度も引いたことのない人間である。頑丈は彼の自慢のひとつだ。

「にしてもよ」雫の滴る金髪を指先で絞りつつ、当麻とビリビリを交互に見やる「お前ら痴話喧嘩も大概にしるよ」

「痴話喧嘩ってなんですか！」「なななななにいつてんのよあんだ！」

「だってそうだろ。いくら電撃出しても当麻には効かないらしいじやねーか。八百長、猿芝居、出来レースもいいとこだ。人の見てないところでやれ」

顔を紅潮させてうろたえるビリビリを無視して、まあなにもなかったからいいけど、と圭介は一度大きくため息をついた。

「卵も無事か？」

「はい。御坂に手伝ってもらってゲットしたお一人様一品限りの卵2パック。貴重な明日からのたんぱく源……！ ああさようならもやしの日々よ……！」

「なら俺も体張った甲斐があった。味わえよたんぱく源」

「はい。喜ベインデックス！ 今日卵パーティーだ！」

「たつまご！ たつまご！ たつまごーっ！」

ずぶ濡れの代価を見つめ、悪くない買い物だったと圭介は思った。損得勘定はもちろん不得手だ。なんと言っても馬鹿である。しかし馬鹿なりにも得できた気分になる。これはそんな温かな 或いは、可哀想な光景だった。

「……おい、そろそろ聞いてもいいか？」

「ああ、ロボットの話だったよな？ えーと、ドリルと二足歩行とビームと変形合体と10万馬力……？」

「知らないか？」

「っていうかなんだその適当に要素かき集めただけのスーパーロボット」

「バレたか」

「いやバレたかってあんた」

「実はどういふのかよくわからねーんだ、これが。どうもすげー強くて俺しか壊せないらしいんだが」

「なんだそりゃ？」

「俺に聞くな」

「はは……なにか知ってるかビリビリ？」

乾いた笑いを浮かべた当麻に話を振られ、ビリビリはびくりと

うろたえた。頬はまだ赤く、見るからに動揺している。一連のリアクションを見て、馬鹿だが勘のいい圭介はなんとなく、ビリビリの当麻に対する好意を理解した。それが恋心か友情か、はたまたもつと別なものか。それは判断しかねるが、相当想われているのは確かからしい。

当然話も聞いていられたはずもなく、あたふたと視線を泳がせた。

「ロボットを知らないか」助け舟を出すことにした。「とりあえず強くて俺にしか壊せないらしい」

「強い……っていうと警備用や軍用のオートマトンとか？」

前髪をいじりながら、落ち着いた様子でビリビリが答えた。頬は飽きもせず赤い。

「よくわからないがそのオートマトン？ はロボットなのか？」

「あんたのロボットがなんなのかは知らないけれど、科学の観点から言えば間違いなくロボットよ」

「どこに行けば会える？」

「そうね……後輩の風紀委員に頼んだら、もしかしたら」

「ありがとっ！」

ビリビリの言葉が終わらぬうちに、圭介はビリビリの両手を握った。ふえ、とビリビリの声が裏返る。腕に一瞬、雷光が走った。「iiiiiiiiやつだだだだだなななびりびりびりびりびりびりりり」

「び、ビリビリ！ やばいつて！ 電気流れてるから流れてるからっ！っ！」

「えっ……あう、離しなさいよあんたが！」

「できでできなななひひひんだんだん」

「電撃で筋肉が弛緩して手が開かないんだよ！ 御坂！ 能力を止めろ！」

「わかってるわよ……っ、うまく頭が回らないのよあんたのせいだっ！」

「よよけいっつつよっよっよっよなでててて」

「あーっ、くそ！」

目の前が真っ白になったこの先を、圭介はよく覚えていられなかった。

気が付けば、世界は箱の中に広がっていた。

文面にするといささか詩的だが、寝そべっているソファアの骨組みの固さや無機質な蛍光灯の明かりを感じると、どちらかと言えば“知らない間に拉致監禁”といったサイコホラー映画を思い出すシチュエーションだと圭介は思った。

ひとまず首もとに手を伸ばし、直に触って首輪爆弾の有無を確認する。幸いにも、そうしたゴテゴテしたものは付けられていない。

上体を起こして左右を見ても書類やらファイルやらの束が所狭しと机の上に山積みされていた。壁際の棚にもびっしり詰まっている。圭介の野性が警笛を鳴らした。勉強のにおいだ。

まさかあの中身を全て読み切れなぞと言われはしないだろうか。まだ“ここから生きて出るには自分以外の全員を1日で殺せ”と命じられた方がマシだ。その方が生き残る芽はある。

それでも圭介は地元では負け知らずとまでいかないが“虎殺しの伊吹”と揶揄されていた男である。

ガテンと修練で鍛えた体を駆使すれば、超能力だかなんだか知らないが、がり勉のもやし学生程度がいくら束になろうと遅れは取らない。拳ひとつで十数の血の気の多い屈強な男達をアスファルトに沈めてきたのだ。

拳を開け閉めして覚悟を固める。闘争心を高めに高めて。

「あら、起きたの？」

声を受けて身を弾ませた。

一瞬でソファアから跳ね起きて床に足をつき、拳は軽く握り直す。そうした圭介のあからさまな迎撃体勢に眉をひそめて、ズレたメガネの端を指先で正した。

整ったショートカットにメガネと、見るからに委員長タイプ的女性だ。

やたらとスタイルがよく、どうてもいいかもしれないが　胸が、大きい。

「御坂さんが連れてきたものだから白井さんか誰かのお友だちかと思っただけだ……違うの？」

腰に片手を当てて、メガネ委員長が圭介に問いかける。

友好的な態度の裏に疑念の芽を嗅ぎ分けて、圭介は警戒レベルを一段階引き上げた。

慎重に言葉を選び　しかしベストがわからない。びっしりと脂汗を顔に溜め、拳を上げてただただ身構え続ける。

傍からは好戦的にしか見えない圭介に、メガネ委員長は新たに捕縛されたUMAを監視するように厳しい視線を浴びせていく。

対峙というには少し毛色が異なるが、こうして視線を飛ばし合うことで、圭介はメガネ委員長がそれなりの場数を踏んでいるようだ と察していた。身のこなしとプレッシャーの掛け方に慣れを感じたのだ。なにより圭介がよく嗅ぐにの片鱗を見て取れる。

知っているにの人間の動きは先読みしやすい。だがそれは相手も同じことだ。

マジで戦うなら相応のダメージは覚悟しなければ　生唾を呑み込む圭介の前で、唯一の出口である戸の前からメガネ委員長は一歩たりとも退こうとしない。利き手を少し、強く握った。

緊迫　空気が張り詰める。攻撃の意識の引き金に指を掛けた。「えーと、固法先輩？」

躊躇いがちな声と一緒にメガネ委員長改め固法先輩の脇で茶髪が揺れた。

見覚えのある顔である。しかし名前は　なぜだか巧いこと思いつかせない。

「終わったの？」

溜め息混じりに固法先輩の視線が外れた。圭介も釣られて構えを解く。

「風紀委員の設備を使うなんて、もうこれっきりにしてよね」

「ごめんなさい。起きたんですか、その人」

「見ての通りよ。……多少混乱してるみたいだけれど」

多少混乱。

言われて、なるほどと妙に納得してしまった。今いる場所も時間もわからない。

目の前の彼女たちが殴るに値する人間かもわからない。

混乱。確かに混乱して。

「あーっ、もーわけがわからないよー」

圭介はそう吐き捨てて、考えるのを止めた。

肺に溜め込んだ空気を思い切り吐いて熱暴走寸前まで追い込まれた脳を急速冷却する。そうして文字通り一息入れて、記憶の糸を声に出して手繰り寄せてみる。

「確か川の近くがピカツとしたから何かなあって覗いたらビリビリ」

「ほっ、ほーら伊吹さんっ!？ ロボット探してるんでしょ？」

「は？ なにそれ？ ロボット？」

「初期設定まで忘れてんじゃねーわよ。ほらこっち」

茶髪はずかすか近づいてきたかと思うと無造作に圭介の手首を取って、どことも告げずに引いていく。

特に悪意を探知しない勘に従って、圭介も無抵抗について行く。

「こまけーこたあいなんだよ茶髪。将来髪に苦労するぜ」

「ならあんたは将来痴呆を患いそうね」

「なんだそれ？」

「……もういいわよ」

固法先輩の脇を抜けて入った部屋は、また物が所狭しと並んでいた。

ふたりがパソコンの前に並んでいる。ひとりは車椅子に腰掛け、ひとりは頭に花飾りを付けている。

「初春さん。連れてきたわよ」

「ありがとうございます、御坂さん」

「そんな。お礼を言うのはこっち」

「もつと言つなら、お礼はそちらの殿方が言うべきではなくて」

車椅子に座る女の子は御坂さんと同じ服装で、髪を頭の両側で結っていた。さも髪が邪魔そうなスタイルである。

その彼女が半眼になってこちらを見つめて 否、睨んでいた。

控えめながらもハッキリとした敵意が伝わり、ひとまず手首を取られて逃げられない圭介は身構える傍ら、口を開いた。

「その殿方つて言うのは俺のことか？」

「男性のことですの」

「なるほどありがとう。あと、ありがとう」

車椅子の子と花飾りの子に向けて、交互に礼を入れる。連行を終えた御坂さんが手首を放し、圭介の体は自由になった。

「初春さん。ロボットの当たりはつけられたの？」

「いいえ。情報が乏しく抽象的すぎます。難しいですね。ですけど

「

言つて、初春さんはエンターキーを叩いた。目まぐるしくモニターに表示される絵が変わっていき、視力8・0を誇る圭介の視界がくらくらとしてしまう。

「第一一学区に最近妙な噂が流れてるんです。“光る目の少女”つていう佐天さんから教えて貰った新しい都市伝説なんですけれど」

「どんな話なの？」

「簡単に言つと、夜中に目の光る女の子にじつと見つめられる、っただけです。こちらに見返されると音もなく消えてしまふんだそうです」

「そちらの方の探すロボットがいかようなものかは存じませんが、まあ話に聞く眉唾で不確かな性能を鑑みれば、一番“らしい”話ですわね」

「おし！」 圭介は牙を見せて獰猛に笑い、手のひらに拳をぶつけてみせた。「マジ感謝するぜ初春さん。今度なにか奢ってやんよ」「都合よく忘れない内にお願いしまーす」

「任せる。恩義は返す」

「馬鹿な猿人類の癖に大きく出ましたわね」

「……エンジン類？ 何サイクルだ？ 排気量は？」

真顔で聞き返す圭介に車椅子の女の子はがっくりとうなだれて

「本物ですの……」と額に手を当てて呆れてみせた。

「で、その、一……七学区？ にはどうやって行けるんだ？」

「第一一学区よ。別学区でなににする気なのあんた」

「おいしい」

「……そんなことだろうと思いましたがわよ」

ふふん、と少しばかり得意げに髪を払い、車椅子の女の子は一

枚の紙を圭介に渡した。

B5サイズの印刷用紙が丁寧に折り畳みである。開いてみる。

地図だ。概略的だが要所要所に必要情報が添えてある。簡潔でわ

かりやすい。

「こんなこともあるのかと、黒子が先んじてルートをプリントして

おいていたのですわ」

「おおー。黒子ナイス」

「……なんで私だけ敬称ないんですの？」

「でも凄いわね、黒子。よくこんなの用意できたじゃない」

「今私はこんな状態ですから」片手で黒子は車椅子の肘掛けをぼん

と叩いた。「情報処理も初春に及びませんから、こういう気配りに

気を付けてみたというだけのことですわ」

「ありがとう。今度黒子にもなにか奢ってやるよ」

「はいはい。……この調子でお姉様のお役に立っていけば……ぐへ

へ

両手を合わせてうつとりとよだれを垂らしてなにかを想像する黒

子の姿は、圭介からすれば圧巻の一言に尽きた（一応、“今まで圭

介が極稀に見かけた病的な人たち”とは違う引き金でこうなってい

ることだけは辛うじて嗅ぎ分けられたため心配こそはしなかったが）

しかし隣のお姉様には圭介の抱いたものとはまた別種の感情が湧き上がったようで、肩を紫電で震わせている。

「なんかよくわからんが大変そうだな。がんばってくれ」

「あなたに言われるまでもありません」

腕を組んでみせて黒子は微笑を浮かべた。

なるほど、とまた圭介は納得する。どうやらこの黒子はいわゆる“残念な美少女”というカテゴリーのようだ。

渡された地図を片手に、圭介はもう一度礼を言っけて身を翻した。固法先輩が出口らしい戸を背にして気難しい様子でこちらを見ている。

「……あんたとはどこかでケリ付けないといけないかもな、固法先輩」

「せ、先輩？」

「あいるびーばっく」

怪訝な顔をする固法先輩に饞別代わりと軽く手を振り、圭介は戸に手を伸ばした。

開いた先は。

「あなた、ここの洗面所でなにをする気なの？」

「すみません。出口、どこですか」

最後まで締められず、圭介はがっくりと肩を落とした。

* * *

心地よい振動に誘われて、圭介はアクセルを踏み込んだ。4サイクルエンジンがより一層に燃料と空気を吸い込んで焼き尽くし、回転力に変換する。車輪は回り、熱を帯びてタイヤを焦がす。

もらった地図に則れば、そろそろ第一学区である。

時間は八時を回るかどうかというところ。日が落ちて“夜”だと

いうことは間違いないのだが、はたして今の時間は都市伝説が言うところの“夜中”の時間帯だと言えるのかは難しいところだ。都市伝説とは、およそ“怪談”の親類のような話題である。夜も早くから仕事を開始してくれるのならよいが。

そんな邪念を頭の隅に抱えて、圭介は軽い操作でギア比を上げた。

手元のメーターによると時速120キロを突破する。間違いなく違法速度のはずだが、圭介の走るハイウェイには正面おるか対向車すら見当たらない。

学生ばかりの街だ。車やバイクを所有している人間は少ないのだろう。バスの本数も少なくなった今の時刻では道路もそう使われないうつだ。小綺麗ながら細々と並ぶ夜間照明はその証拠だろう。

電光板の道先案内が第一学区に入ったことを告げた。緩やかに下り坂に差し掛かり、周囲の壁がコンクリートから生け垣に変わる。

圭介はアクセルから足を離し

(……っ！)

かけて、思い切り踏み込んだ。

圭介を乗せたバイクが唸りを上げ、同時にバイザー越しの夜景の一部が青白く発光した。ネオンや照明とは異なる性質を嗅ぎ取って、しかし直後に青白い光は圭介の走るアスファルトを灼いた。

がくん、とバイクが体勢を崩す。後輪が光に炙られたのだ。内圧は消え失せ空気が外に逃げていく。前後の車輪のコンディションの違いが走行に致命的な欠陥を穿ち、アクセルを離して姿勢制御に徹する圭介をあざ笑った。

道がカーブに入る。下手にハンドルを切れば未だに時速100キロを越えている状況でアスファルトに叩きつけられてしまう。さすがの圭介といえども無事では済まない。ブレーキも同様だ。圭介は生唾を飲み込んで 生け垣に突っ込んだ。

アスファルトを踏んでいたはずのバイクが宙を舞い、圭介はハン

ドルから手を離れた。バイクが圭介を置いていく。

下は倉庫街だ。コンテナや木箱、ダンボールが室内外を問わずに規則正しく積み重ねられている。

助かるかどうかは　ただの運だ。

* * *

暗がりの中で、圭介は目を覚ました。軽く頭を振って周囲に目を向ける。

近くの窓ガラスは見事に割れており、圭介の下には潰れたダンボールが幾重にも重なっている。大方、ガラスを突き破って倉庫の中で積み重ねていたダンボールの山に突っ込んだのだろう。

それでも中身がハードカバーだったりパソコン部品だったりしたら無事では住まなかつたろうが、どうやら上手いこと野菜を引き当てたらしい。トマト臭いわけである。今日も圭介の悪運の強さは折り紙付きのようだ。

赤い果汁で全身がずぶ濡れに近い状態だが、大きな外傷は見当たらない。奇跡的である。

右腕がしびれているようで力を込められない。外傷がないのは確かだから、時間が経てば治るのだろうか。

立ち上がり、しかしなかなか並行感覚が蘇らない。ふらつきながらも財布を取り出し、その場に有り金を全て残して後にする。

脱いだヘルメットで無造作に窓を割り、ふらふらと倉庫を出る。直感。視線を左に走らせた。

女の子がそこにいた。高慢な性格が立ち振る舞いからも嗅ぎ取れる。九死に一生を得る体験をした直後に相手をするにはいささか面倒くさそうな相手だ。

「運いいわねえ、あなた。普通死んでるわ」

女の子をきっぱりと無視して圭介は視界を広げた。一緒に飛んだバイクも近くに転がっているはずだ。足を一步、前に伸ばす

「動くんじゃないわよ」

青白い光線が走り、足元が灼け焦げた。浮かせた圭介の足がぴくりと止まり、視線を女の子に注ぐ。

先ほどから圭介を襲っているものと同種の光。それが淡く、彼女の伸ばした腕を照らしていた。

「……なんだよ、あんた」

「なにそれ。やっぱり馬鹿なのねえ。滝壺も感知できないみたいだし、本当に無能力者のチンピラなのねえ」

「とりあえずバカにされてることはよくわかった」

ため息をついて圭介は一步前に 出ようとして、また光線に阻まれた。

「動くな、って言ってるの。この私が。てめえみたいな無能力者のために。学園都市最強の超能力者第四位の『原子崩し』 麦野沈利がな！」

語気を荒げ、麦野沈利が拳を振り上げた。軌跡に沿って腕から光線が亜光速で空気を灼き切り、すぐ右手のコンテナを無造作に切り裂いた。赤い切り傷にコンテナは揺れ、上半分がアスファルトに落ちて埃が舞った。

圭介は麦野沈利から目を逸らさない。

「俺はバカだからよくわかんねーんだが、どうして俺を狙ったんだ」「わからない？ 知らないわよそんなこと。まあ、無能力者のクズの分際で、私たちに喧嘩を売ってきたのが悪かったのね」

よくわからん。

圭介は肩をすくめ、レザージャケットのポケットに手を突っ込んだ。

「それで、お前は結局俺をどうしたいんだ」

「殺すわ。本当は飽きるまでいたぶって遊んじゃおうと思ってたけれど、無能力者のくせに随分しぶといみたいだから、追い回して追いついて追い回して追いついて、最期はあっさりまっぴらつ。いいわねえ、ゾクゾクする」

レザージャケットから、黒いグローブを片方だけ取り出した。革のような質感である。拳の部分は特別太くなっており、拳の保護作用が期待できる。

左手にそれをはめ、すっ、と圭介は鋭く空気を吸った。頭を垂れ、目を瞑る。

「なんだ？ お祈り？ それとも地獄行きの手ケットでも予約してんの？」

「……あなたは、」
目を瞑ったまま、圭介は口を開いた。重々しく、噛みしめるように。

「“越えてはいけない一線”を、越えた」

「はあ？ 熱血教師の真似事かよ。不良で、チンピラで、馬鹿で、無能力者のお前が？」

「あなたの事情は知らない。理由も知らない。それでもこんな、誰かを傷つけて笑えるあなたは、絶対に許せない」

絶対に許せない。

そう断じた圭介を麦野は笑い飛ばした。表情を手のひらで隠して夜空を仰いで、ふいに笑い声が消えた。

低く、自尊心を傷つけた男に問う。

「てめえ……何様だ」

「俺か？ 誰でもないさ」

圭介が顔を上げた。グローブを付けた左手を握り締め、麦野に向ける。

「通りすがりの、今からあなたをどつく男だ」

「ふっ、ざあああっ」

直感に従い、圭介はレザージャケットをはためかせてアスファルトを蹴り飛ばした。一瞬遅れて麦野の腕からまた『原子崩し』の閃光が走る。

『原子崩し』はまっすぐ伸びた麦野の左腕に従って直線的に空気を灼いて、圭介の体を淡く照らした。

「つけんじゃねえ！」

麦野が続けて腕を振るい、圭介を追走する。「原子崩し」はそれに倣い、麦野から向かって右を疾走する圭介へと雑払われた。

圭介はアスファルトを蹴って体をひねり、飛び込みの前回りで「原子崩し」を避けてみせる。

麦野が悪態をついて左腕を無造作に払い、「原子崩し」の光が消えた。連続使用には不向きな能力なのだろう。生身の身体でアスファルトもコンクリートも難なく切り裂く光を扱うのだ。制御できなくなった場合の事は、想像に難しくない。

麦野沈利まで、およそ20メートル。100メートルを10秒以内に走りきる圭介が本気になれば、どつく距離まで詰めるのは難しいことではない。鋭く呼吸し肺に空気を溜め込み、奥歯を噛み締め、体内ギアをトップに叩き込む。

“無酸素運動モード” などと言うと大仰に聞こえるかもしれないが、要は呼吸を止めて極限まで動き続けるだけというものだ。瞬発力を要する短距離走などでも使われる方法である。

無呼吸は戦力で動きながらでは1分半がせいぜいだ。圭介は自身の性能をフル活用し。ただ、麦野沈利をどつくことだけを考える。「なんで……っ！」

残り10メートル。

麦野が左腕を上げた。

前髪がチリチリと信号を受信し、全身の毛が逆立った。本能が告げる。直感が囁く。培った経験が警笛を鳴らし、その身に息づく技術と知識が具体性を連れてくる。

目線や肩、節々の拳動から読み取る麦野の狙い。それを信じて、或いは無視して。結局は勘に頼って、圭介は文字通り身を振った。麦野の伸ばした五指から「原子崩し」が放たれた。掲げた左腕を振り下ろし、5本の「原子崩し」がアスファルトを切り裂く。

間一髪、圭介は右に身を転がしていた。ジャケットの裾が掠ったように、端が少し煤けている。

再び麦野は『原子崩し』の爪を立てた。だが必死に圭介を捉えようととして手を広げすぎている。

多くなつた代わりに一本一本が細くなつた『原子崩し』の指の間を狙い、アスファルトを滑って切り抜ける。抜いた『原子崩し』を見送らせず、圭介はアスファルトを蹴った。

どつきの間合いまであと数歩。

突っ込む圭介に麦野が口端を歪める。左手はもう光っていない。時間切れにはまだ早いはず　圭介は目を見開いた。

「かかったな無能力者あああああああああああああああああああ
ああっ！！」

麦野が右手を広げる。空間が一瞬ぐにやりと歪み　真正面に『原子崩し』が迫り立った。

『原子崩し』の光の壁にぶち当たれば、最早峰打ちも何も無い。その瞬間に文字通り“消滅”する。

“消滅”の2文字を垣間見て、しかし圭介は足を止められない。思い切り、アスファルトを　蹴り飛ばす。

コツ、と思いのほか小気味よい音が夜闇に響いた。

音に誘われ麦野は視線を走らせて　ただ呆然と目を見開いた。
『原子崩し』の盾を背後に見送り、圭介は足元の“コンテナの壁”を蹴り飛ばした。

壁走り。

人が。

「ばっ……」

麦野が怯んだ。

決めるなら、今だ　ッ！

腰を回し体をひねり、コンテナを蹴った勢いに乗って右足を横雑に振り抜いた。

つま先が麦野のテンブルを捉える。全力で振り切った右足が麦野の華奢な体を容赦なく吹き飛ばした。血しぶきが頬に当たるも、トマトの赤も相まってどれがどれだかわからない。

圭介は地面に降り立ち、一層奥歯をかみ締めた。

麦野がまだ立っていたのだ。

圭介の蹴りを受けて仰け反り、吹き飛ばされ、しかしダウンはしていない。膝は笑っているし息も絶え絶えだが、意識は失っていない。俄かに信じられないが戦意も喪失していない。左腕は泳ぎ、どこか虚ろな瞳は何かを 圭介を捜している。

驚異的な精神力だ。学園都市最強の超能力者第四位と大見得を切っただけのことはある。

それなら、と圭介は左腕を腰だめに構えた。

駄目押しの一撃だ。意識を断ち切っておかなくては逆上して『原子崩し』の制御を無視されても困る。

麦野に向け、圭介は大きく一步、踏み込んだ。一度大きく姿勢を屈め、しなやかに、鋭く体を起き上がらせた。その勢いをそのままに、左拳が弧月を描く 俗にガゼルパンチと呼ばれるそれは、満身創痕の麦野の顎を捉えた。軽く、しかし確かな手応えを感じて、圭介は無慈悲に左腕を振り切った。左拳が天を衝き、麦野の体は二転三転と宙を回る。やがて夜空から身を落とし、アスファルトに背を打ちつけた。地面で大の字に倒れた彼女は小さな呻きを一度あげ

沈黙。

ぶはっ、と圭介は大きく息を吸い込んだ。おおよそ1分だ。激しくカタを上下させ、新鮮な空気を肺に詰めていく。

顔を上げ、息を整え 回り始めた愚鈍な思考が、釈然としないう気分を連れてきた。

確かに麦野沈利は強かった。ひとつ勘が外れば『原子崩し』でまっふたつになっていたことは間違いない。単に初撃がヒットしたのも、圭介が“崩れていたコンテナの壁を走る”などという、ある種常識的な人類の身体能力を逸脱した動きを見せて不意をついたからである。

手傷こそ負わなかったが、決して楽勝だった訳ではない。再戦すれば本当に危ない 圭介は底抜けの馬鹿であるが、手合わせした

実感として、それは理解していた。釈然としない理由はそこではない。

ただただ単純に、空しかったのだ。

よくわからずふっかけられた喧嘩。高慢な態度。残虐な姿勢。外道な振る舞い。それらが気に食わなくて買った喧嘩だが　中身がない。大仰に言えば“大義”がないのだ。

圭介もかつては全国制覇を目指した不良である。三分の一ほど制圧したものの“とある事情”から足を洗ったのだが、決してどつきあいが嫌いになった訳ではない。無秩序な中での己が生存とチームの誇り、全国制覇の夢を賭けての闘いには胸が高鳴った。

だが。

ここには、それが無い。

ただ人を見下すだけ。強靱な能力で蹂躪するだけ。

誇りも夢もそこにはない。純粹な生き残りを賭けた喧嘩だ。

命と誇りを握り、夢に向かって伸ばしていた自身の拳に視線を落とす。血と汗が染み付いたグローブを開いても、手のひらにはなにもない。多少スカツとしただけだ。これではゲーゼンのパンチングマシーンと相違ない。圭介の喧嘩には、昔はもっとロマンがあったはずなのに。

ため息をひとつついて、圭介は踵を返した。左拳をグローブから抜いてバイクを探して視界を広げた。

バイクらしいシルエットはすぐに見つかった。存外近くだが。

。　　阻むように、女の子が立っていた。

最初の日・深夜 「21:40」

またか　とは思わなかった。

銀髪が艶やかに夜風に流れ、しかし四肢は微動だにしない。ただ無表情に、圭介へと目を光らせている。

比喻でなく。

本当に、目を光らせていた。

瞳の色が乗った碧い眼光が圭介を射抜く。光自体は弱いようで、はつきり光線としては現れない。だが、双眸は淡く夜闇に浮いていた。

“光る目の少女”。

どうやら都市伝説の出自は彼女で間違いないようだ。

だが、それならばそれでおかしい。

なぜ、圭介に見返されて姿を消さないのか？

「けっ」

そういうことか！

圭介は身を沈ませた。直感に従い上体を揺らす。左右のフェイントを織り交せてアスファルトを蹴った。

銀髪が右腕を伸ばす。途端に手が肘まで割れたかと思うと、がちゃがちゃと何かが組み変わるような音を携え

「……はっ？」

ものの数秒で、華奢な右腕が機関銃の砲身へと様変わりした。

圭介は開いた口が塞がらず、手元からグローブがぼろりと滑り落ちた。

機関銃。

その中でも回転式機関銃と呼ばれる類のものだ。

砲身が回転して数珠繋ぎになった弾薬を湯水のように食いつぶし、豪雨のようにターゲットに弾丸を叩き込み、足元に空薬莖の絨毯を

引く。そんな骨太なガンアクションでよく見る光景を作り出す重火器である。洋画の殺人ロボットや軍事ヘリなどで使われている物騒な兵器だ。俗にガトリングガンと呼ばれている、アレなのだ。

ある種、男のロマンを感じる武器である。

それに、そんなものに、腕が変形。

目の当たりにして、心が震えた。

なければ。

砲口が向けられてさえい

奥歯を強く噛み締めて、圭介は“無酸素運動モード”に切り替える。靴底で蹴り飛ばしたアスファルトが、一瞬後には砂塵に変わり夜風に散った。

ロボ子までおよそ15メートル程度。これ以上間合いを詰めるのに、ガトリングの弾幕は邪魔すぎる。

ロボ子を包囲するように円を描いて弾幕から逃げる。

ロボ子のガトリングは大雑把な狙いだが切れ目がない。どこから装填しているのかは知らないが、どうやらリロードの隙はないに等しいようだ。空薬莖だけか足元で川を築いている。まったく隙が見当たらない。

“無酸素運動モード”のタイムリミットもある。残り40秒。タイムオーバーすれば圭介の動きは鈍ってしまう。そうすれば格好の的だ。

このまま戦っても勝算はない。

やはり逃げるか？

逃げる　その発想を圭介は意図的に避けていた。

ここで逃げたら、大切ななにかが一生無くしたままになってしまふような。今まだ消えない釈然としない感覚が、未来永劫胸の内から消えてくれないような気がするのだ。

理由はない。わからない。ただの勘だ。

しかし、ここまで圭介を生き延びさせてきた勘だ。今まで信じてきた勘なのだ。

ならば、賭ける。

命を賭けて信じる。

今までそうやって生きてきたのだ。

後悔しないためにも、自分自身を信じ抜け　ッ！

モヤモヤとしていた圭介の胸の内が闘争本能で埋め尽くされ、四肢に気力が滲み渡る。地面を蹴り上げる膂力が増して、体の動きは刻一刻と鋭く変容していく。

円運動をから反復横跳びのようなジグザグな動きに切り変わる。上下左右のフェイントを混ぜて巧みにガトリングの弾丸の群れを避け、かつ間合いを詰めていく。

残り20秒を過ぎ、間合いは10メートルを切った。

残り時間と間合い。微妙だ。もう少し詰められれば、踏み込み次第で瞬時に懐へ飛び込めるが

ガトリングが夜闇を切り裂き、巻いた乱風で圭介の頬の汗が弾け飛んだ。

それにも構わず圭介は上体を揺らし、足を捌いてじりじりと間合いを殺していく。

紙一重の回避でジャケットには穴が開き、肌には赤い線が幾重も刻まれる。

圭介は目を逸らさない。

目を逸らすことは隙を見せることに直結し、隙を見せれば首根っこから肉塊に変わる。

極限状態で一瞬一瞬重なることに鋭敏になっていく感覚　。

音が遅い。

風が匂う。

硝煙の味が口に広がる。

今わき腹に触れた銃弾の径口と回転速度を読み取れる。

時間すら、止まって見えた。

それが、知覚する。

「くウウウずウううううあああああああああああああああ
あっー！」

見なくてもわかる。五感が伝える。

麦野が起きた。

腕を上げる。圭介に狙いを　今、定めた。

ガトリングガンから避けている圭介を麦野沈利の『原子崩し』
が切り裂けるのか？

できる。本能が伝えた。

避けられるか？

できる。本能が伝えた。

ガトリングから意識を逸らして？

できない。本能が伝えた。

ガトリングに全神経を集中しなければ撃ち抜かれる。

『原子崩し』に全神経を集中しなければ切り裂かれる。

本能が両立不能なふたつを提示した。戦慄で背筋が凍る。

こうして動き続けられるのも、あと10秒だけなのだ。

* * *

麦野沈利の殺意が膨れ上がった。来る。しかしどうしようもない。

割れんばかりの勢いで奥歯を噛んだ。

こんな、“くだらないところ”で、死ぬのか？　俺は……ッ！

一瞬が永遠にまで引き伸ばされた感覚。拳には意図せず力がこもった。

刹那ののち。

ガトリングガンが止まる。硝煙を吐き出す砲身をよそに、瞬時に元の腕に変形した。

あの光る視線が、圭介でないどこかへ　麦野沈利に向いていた。

圭介の鋭い五感が事実だけを伝えた。

『原子崩し』は来ない。

麦野沈利は、倒れた。

ガトリングも閉じた。

隙が、できた。

打ち込め！

身を沈め、圭介は思い切りアスファルトを蹴り上げた。体を浮かし、腰を右に回して、右足を横雑に走らせる。

「でいいいいいいいいいいいやあああッ！！」

右の踵をロボ子の頭部に叩き込んだ。硬い。衝撃が強く圭介にも伝わる。

だが、ロボ子の体もまた揺らいだ。両足が地につく。全開運動は残り3秒。

次で決める。

腰だめに握り締めた右拳。先の蹴りの右回りの勢いが残っている。

力を集め、想いを握り、圭介は拳を繰り出した。

なんの技術もない。ただの直線的な右。

あるのは、圭介の全力。魂の一撃だ。

その魂の魔法は、ロボ子の体を仰け反らせ

「がっ……」

小さなノイズを呟かせ、沈黙させた。

ようやく大きく息を吐いて、圭介はその場に崩れ落ちた。

怖かった。

久しぶりの感覚だった。死を意識した感覚。死神に足首を捕まれていると意識した瞬間だ。

恐怖した。こんな“くだらないところ”で死ぬのは嫌だと思っ

た。

“くだらないところ”。

訳も分からず戦って、訳も分からずぶち倒す。

学園都市。学校と勉強の街。そんなところに来てまあ、圭介

を取り巻くのはこんなものだ。

昔となにも変わらない。追いかけていた夢やロマンが消えていること以外は。なにも。

目的がない。

中身がない。

張り合いがない。

道理で釈然としないはずである。これでは　そこに転がる口ポットと、なにも変わらない。

「いつてえ……」

夜空に右手を翳してみせる。星明かりはあまり見えない。

工業地帯の第一一学区自体の明かりは弱い、近隣の学区の照明が強いのだろう。この時間帯なら、地元では星の海を泳げたものだけれど。

右手の甲が赤く塗れている。トマトではない。ロボットを思い切りどついたのだから仕方ない。幸い折れてはいないようだが。

痛めた拳は戒めだ。考えなしに流されて戦った、馬鹿な自分への罰。

これからは考えなくてはいけない。こんな空虚な戦いをしないためにも。

伊吹圭介はなんのために生きていけばいい？

だが、やはり、答えは出ない。

ため息と一緒に上体を起こした。目端に麦野沈利を確認する。まだ眠っているようだ。ロボ子がかをかしたのは間違いないだろうが。

「……ッ?!」

不意に、圭介は身を凍らせた。感覚が鋭利に復活を遂げ、夜風に耳を傾ける。

聞き慣れた音。サイレン　警察!!

「やっべえええええ!」

なにかまずいのかも整理がつかない内に圭介は跳ね起き、視線

をぐるりと一周させる。バイクはすぐに見つかった。

そこでまっすぐバイクに行かず、思わず麦野に石を投げたり口ポ子を小突いて意識の確認なぞをやるあたり、圭介は相当に混乱していた。

圭介は一度自分の顔を殴りつけてから、大きく深呼吸をした。現状を整理する。

状況的に圭介はまずい。寝ている女。殴打した圭介。状況証拠で見つかれば即ブタ箱である。

まして治外法権的な雰囲気のある学園都市だ。捕まればただでは済まない。

さつさと逃げねばならない。急いでバイクに駆け寄った。エンジンのかかった。

しめた、と圭介はバイクにまたが
「うっ」

ろうとして、身を震わせた。

バイクの燃烧タンクが割れ、ガソリンがアスファルトに溜まっている。

周囲は麦野の『原子崩し』でズタズタだ。　　そういえば、最近
は景観を損ねないために電線やガスのラインが埋まっていると聞いたよつな。

まさか、あのガソリンの水溜まりの近くの亀裂にも　　？
「嘘だこんなことおおおお！！」

予感不幸にも的中した。
アスファルトの亀裂から切断した電線にガソリンが触れて電流
がガソリンを燃え上がらせた。

走る炎は源泉であるバイクに到達し　　爆発。そして炎上。

バイクが火だるまに変わり、危うく圭介にまで巻き込まれそう
になる。支えを失い、倒れるバイク。電気と一緒に漏れる天然ガス。
更に爆発　　。

* * *

そんなわけで。

伊吹圭介の学園都市一日目は、爆発才子に終わった。

最初の日のあとがき (ネタはばらさないつもり)

さて。

いかがでしたか。禁書してましたか。

不安です。非常に不安です。オリキャラがオリキャラなので。レベル上げて物理ですよまったく。

一応時系列的には大覇星祭前。アニメ組なので色々イメージで補っているところがあります。そういう意味ではアドバイス等が頂けるとありがたいです。

一応、不良少年の学園都市初日はこんな感じですよ。

私は思います。ジョジョ3部の潔い近接パワー型主人公って、かつこいいじゃないですか。まあ4部派なんですがね。

まあそういった思惑あり、憧れあり、こんな感じですよ。

まあ見ての通りオリジナルキャラはあんな感じですよ。

馬鹿な主人公がふらふら学園都市で遊んでいる感じでもいいかなと思っただんですよ最初は。

いつしか目標ができ時間制限ができ、こんなつくりの一日目ですよ。イントロダクションの体裁ですよ。

……と、整ってるだろ？(汗)

今回は超電磁砲編、禁書目録編と続く予定です。続けばいいな。

……やべ、時間制限について触れ忘れたでしょう。

やはり人間夢は重要です。毎日が楽しくなります。

かくいう俺も夢があります。第2次スパロボZを後編が出るまでに4週クリアするという夢が！

……やべえ発売日を買ったのにできる気がしねえ。

キャラクター設定「伊吹圭介」

17歳。男性。

金髪黒目の東洋人。パーソナルカラーの赤をジャケットやバイクに使っている。

端的に言うところ「脳筋」。

無自覚ながら超能力を使用できる。

過去、北陸を制覇したチーム雷衝<ライトニングスマッシュ>の三代目総長を張っていた男。

当時の伝説を「百人のモヒカンを10分で潰した」「峠で音速を超えた」「ガス欠からの天城越え」「バイクで富士山登頂余裕でした」などなどと自称するが、どこまで本当かは不明。正直よく覚えていないかららしい。

乗っているバイクはチーム引退時に拝借した先代から受けついたものをリペイントしたもの。キーには約束の品が下がっている。

幼少のころは親の都合で各地を転々としており、3か月滞在した中国の秘境で出会った「仙人」との修業で体の使い方を覚える。卓越した身体能力の基礎はその時にできたが、現在にまで向上したのはのちの鍛錬によるもの。

身体能力はおおよそ「標的を認識してから0.1秒で八木の巢にする、天井に設置された機関銃を避けながら壁走りをしてから蹴り壊す」程度の能力。

呼吸を止めて極限まで互換と身体能力を上げる“無酸素運動モード”は連続使用は1分半程度。能力向上のほか、呼吸を読まれず隙や行動を読まれにくいという利点もある。

超能力については後述。

先読みの類ではない。直感や勘、本能で敵の動きを予測しているが
正答確率は異常に高く勝負運、悪運も強い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5088y/>

魔不良冒険奇行 ~ 電撃! 学園都市編 ~

2011年11月27日01時49分発行